

## 02 修士設計

開講年次：修士2回生

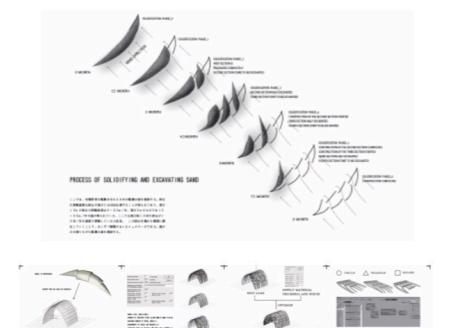
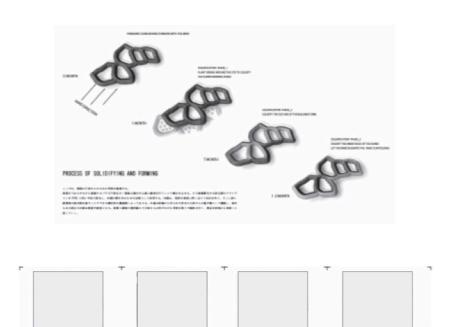
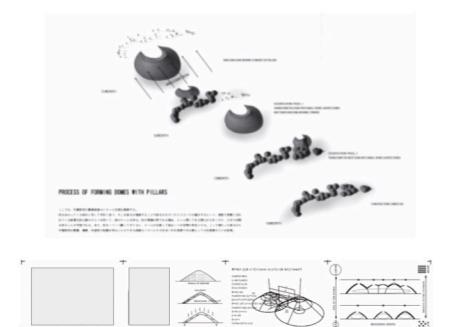
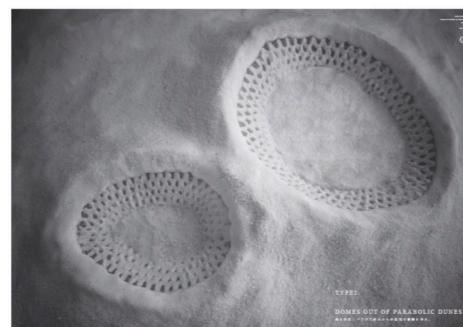
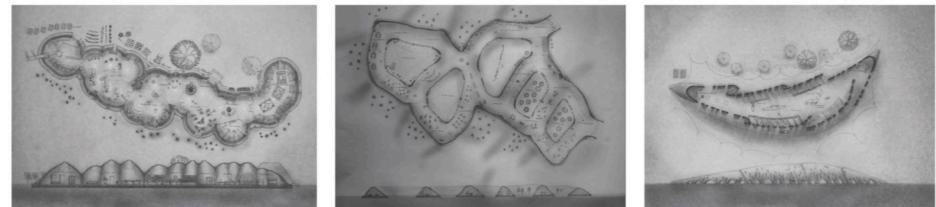
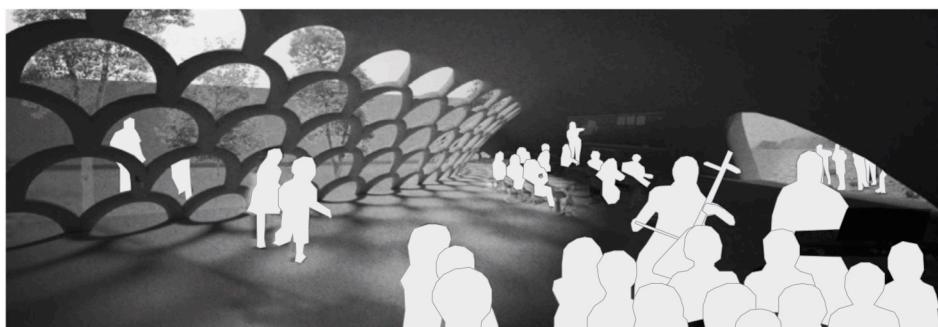
## 砂の建築の可能性に関する研究

- 内蒙古クブキ砂漠における砂を用いた設計を通して -

伊庭明香（遠藤研究室）

「砂」は今までコンクリートの骨材以外では建材として着目されてこなかったが、現在様々な素材や構法の開発が進むなか、併用することで使える可能性は十分にあると考える。一方では砂が引き起こす砂漠化が世界中で深刻化している。「マテリアルとしての砂の可能性」、「砂漠化という現象」の2つを軸に、砂についての考察を行う。そこから得られた知見を基に、無尽蔵にある砂というマテリアルを使用して砂漠化の抑止を助けるような建築を提案する。

ケーススタディとして内モンゴルの砂漠地、クブキ砂漠を敷地として設計を行った。



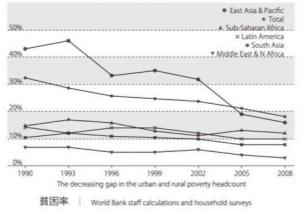
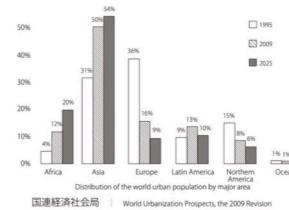
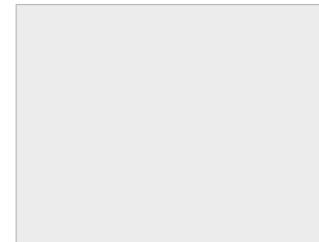
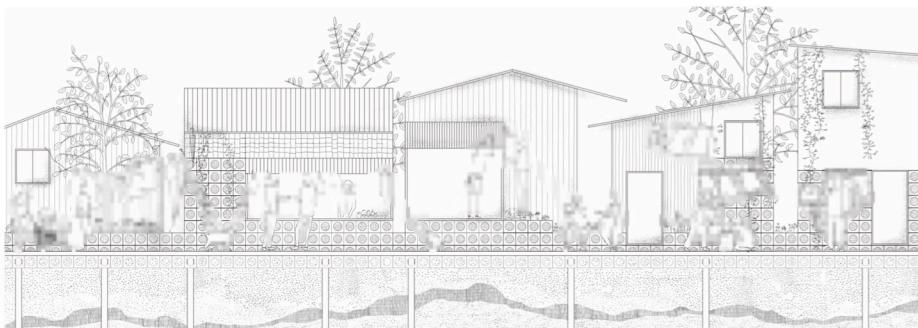
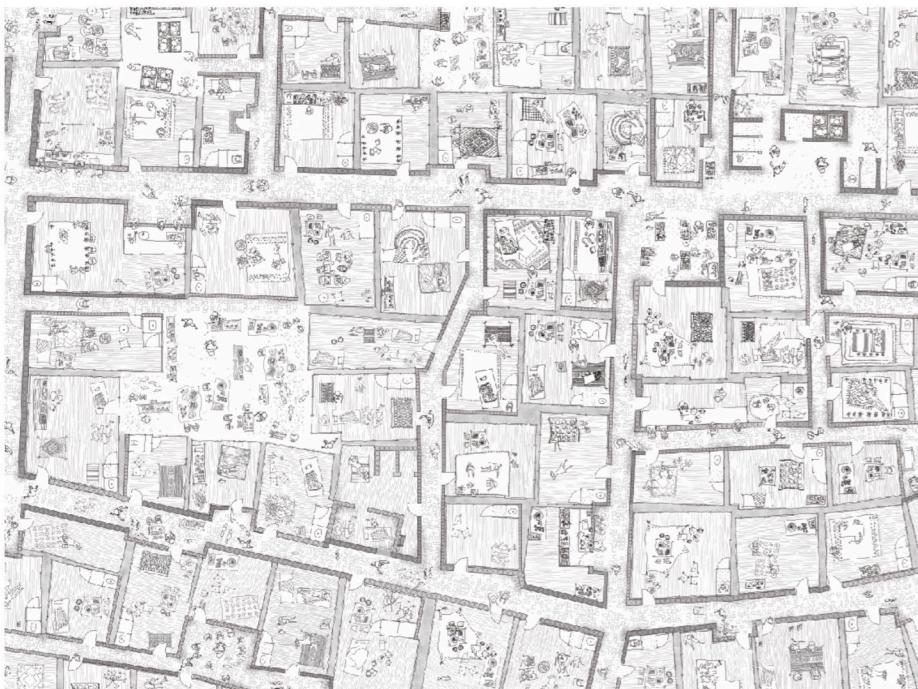
## 東南アジアのスラムにおける経済成長に応じた住環境整備手法の研究

### - バンコク都クロントイスラムを事例とした簡易的インフラシステムの設計 -

高橋良至（遠藤研究室）

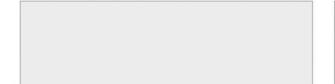
スラムは産業革命以降、経済成長の副産物として世界中の至る所に発生し、現在に至るまで拡大し続けてきた。しかし昨今、都市の拡大・一極集中型の成長にかけがりが見え中規模・小規模の都市が増えているため、今後スラムの多様化が進行していく事が推測される。

そこで今回、住宅供給を主とするクリアランス型の更新手法の代替案として、小規模で簡易的なインフラシステムを用いた段階的なリノベーションを行う。これまでの雑然さを維持しつつ衛生環境や環境意識の向上などトータルなスラムアップグレーディングの可能性を示唆する提案である。



#### 路地に着目

スラムの重要なファクターとして「路地」を設計に取り込み、動線と建物の境界に下水道・電線・上水道を兼ねたインフラトラックチャーとしての壁を挿入する。各建物がこの壁と接続することで集約されたインフラ機能を享受する仕組みである。



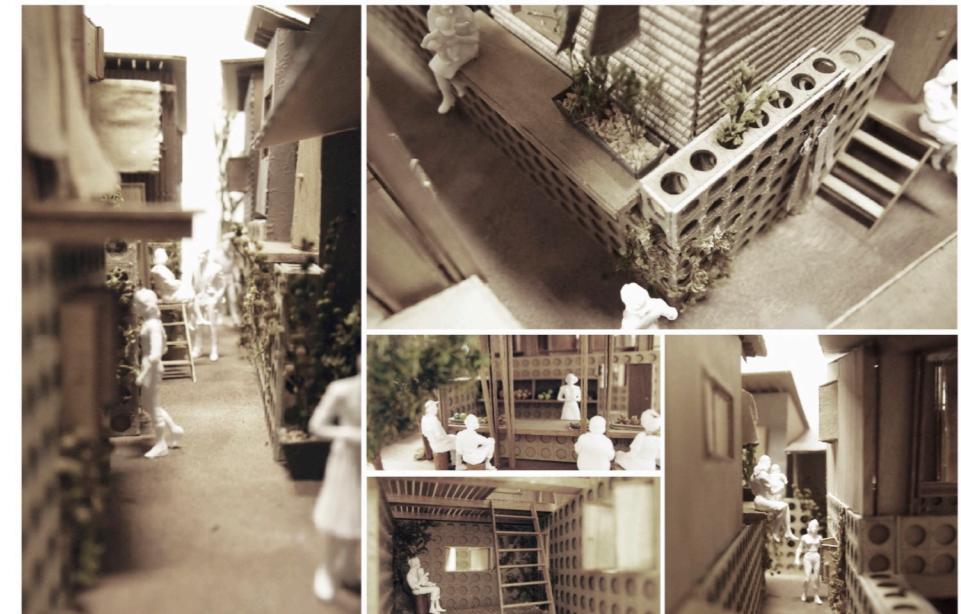
#### インフラ壁の構成

スラム特有の路地の狭間に(隙間がない箇所は一部舗装撤去し、住居に沿うように)インフラ壁をセル化し、中空のコンクリートブロックを採用する。そうすることで、施行性が高まる他にも、下水管や貯水槽の内包、充填素材を変化させることができ可能なフレキシブルなユニットとなる。



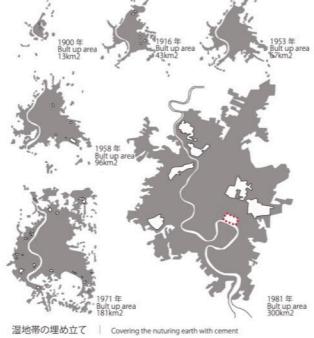
#### 建設プロセス

路地両脇の隙間に(隙間がない箇所は一部舗装撤去し、住居に沿うように)インフラ壁をセル化する。その際構造ユニットを支えるために竹杭による地盤改良を行う。スラムという環境下でロードストックかつ資材確保が容易な竹を利用することで、手動の油圧打機で施工が可能となる。



#### 杭上の不良住宅群

スラムは地理的に不利な地域に形成される傾向があり、このクロントイスラムも例外ではなく湿地帯の杭上の不良住宅群として存在している。しかしインフラ普及率は比較的高い過渡期にあるといえる。



## 2013年度修士設計題目一覧

氏名	修士設計 題目	指導担当
伊庭 明香	砂の建築の可能性に関する研究 -内蒙古クブキ砂漠における砂を用いた設計を通して-	遠藤秀平
岩崎 奈央	那智勝浦温泉ホテル浦島改築設計提案 -日本の情緒感覚の研究を通じて-	遠藤秀平
秋田 遼介	「繋がりの街」の設計 -避難指示解除準備区域における「帰還」の研究を通して-	楳橋修
浅田 翔大	柳宗理のデザイン思想・手法に関する研究 -暮らしの中の道具が持つ関係性を手がかりとした建築空間の設計-	遠藤秀平
岩田 翔	広場化する商空間 -洛中洛外囲屏風を手掛かりとした間と公共性の研究を通して-	遠藤秀平
木作 洋輔	都市に自然を組み込む建築空間の設計 -水網集落における人と水との関係性を手掛かりとして-	遠藤秀平
小山 駿介	豪雪地域に根ざした親雪空間の設計 -雪国における雪との関わり方の研究を通じて-	楳橋修
高橋 良至	東南アジアのスラムにおける経済成長に応じた住環境整備手法の研究 -バンコク都クロントンスラムを事例とした簡易的インフラシステムの設計-	遠藤秀平
中村 秋香	岩手県上閉伊郡大槌町における公共施設の設計 土地に根ざした行為の空間の研究を通して	楳橋修
二村 緑菜子	解体木材再使用に関する提案応急仮設住宅と支援校舎の設計を通じて	遠藤秀平
山内 翔太	感覚的要素を内包した空間モデルの設計 -PLEATS PLEASE ISSEY MIYAKEの身体と衣服の関係性の研究を通して-	遠藤秀平
山田 恭平	受け継がれるもの・積み重ねるもの -気仙沼市内湾地区における被災前後の空間性を生かした商店街の設計-	楳橋修
殷 小文	外国人留学生集住施設の設計 -世界の飛び地の研究を通して-	遠藤秀平

### 那智勝浦温泉ホテル浦島改築設計提案 一日本的情緒感覚の研究を通じて一

岩崎奈央（遠藤研究室）

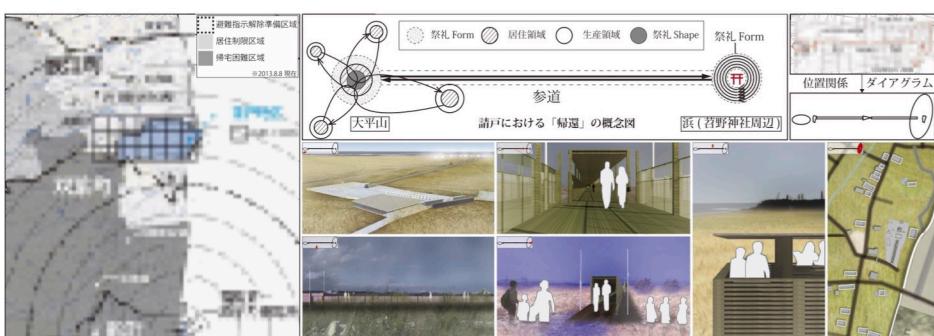
昭和期に大規模開発されたリゾートホテルを改築し、日本的情緒のある空間と景観を再生する計画。改築対象は、和歌山県那智勝浦町に位置する勝浦温泉ホテル浦島。空間の力とは感性そのものの定義のもの、日本人の感性として代表的な「花鳥風月のころ」について認知心理学



### 「繋がりの街」の設計 一避難指示解除準備区域における「帰還」の研究を通して一

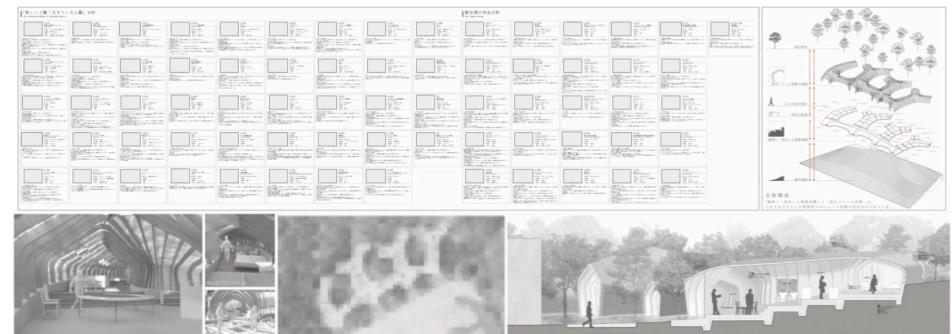
秋田遼介（楳橋研究室）

福島県双葉郡浪江町請戸地区は、東日本大震災による津波の被害を受けた。それに加え、福島第一原発事故による放射能汚染により、現在「避難指示解除準備区域」に指定され、住民は町外への避難を余儀なくされている。しかし、今後避難指示解除が始まれば、放射能の潜在的リスク



### 柳宗理のデザイン思想・手法に関する研究 一暮らしの中の道具が持つ関係性を手がかりとした建築空間の設計一 浅田翔大（遠藤研究室）

日常的に私たちの身体に直接触れることによって、その形態が形成されてきたといえる「暮らしの中の道具」を取り持つ関係性に着目し、その関係性を手がかりとした建築空間を提案するために、生涯にわたって道具が持つ始原的関係の奪還に務めたといえる柳宗理のデザイン思想及び手法を研究した。



### 広場化する商空間 一洛中洛外囲屏風を手掛かりとした間と公共性の研究を通して一 岩田翔（遠藤研究室）

京都の市街（洛中）と郊外（洛外）の景観や風俗を描いた洛中洛外囲屏風を手掛かりにする事で、何かの途中や裏手に離散的に分布するしか無かった日本の公共性を変質・集合させる可能性を探った。

洛中洛外囲屏風に見られる間の技法やスケールの変化の仕方を分析して

その後、暮らしの中の道具 70 点の分析を行い、そこにみられる関係性を記述した。最後に敷地条件とプログラムを定め、得られた知見を建築の言語へと置き換えた後に具体的な手法を導き出し、設計を行うことによって建築空間を提示した。



### 都市に自然を組み込む建築空間の設計 一水網集落における人と水との関係性を手掛かりとして一 木作洋輔（遠藤研究室）

本設計の目的は、人と自然の関係を見つめ直すことで、自然から切り離されてしまった現在の都市ではない自然との接し方を発見し、建築によって都市と自然の関係を結び直す事で、都市の中に、都市の窮屈さから解放される空間を構想することにある。

人と自然、都市と自然の関係性の歴史を見つめ直し、実際に水網集落において現在も受け継がれる人と水の関係性を読み解きながら、これらの都市建築および都市空間を考える。



## 豪雪地域に根ざした親雪空間の設計 ー雪国における雪との関わり方の研究を通じてー

小山駿介(楳橋研究室)

新潟県十日町市芋川集落は、少子高齢化で活力を失う中山間地集落が多い中、集落民主化の地域おこしの活動により、集落内外から多くの交流人口を獲得している。しかし積雪時には、多くのアクティビティは失われてしまう現状にある。



## 岩手県上閉伊郡大槌町における公共施設の設計 ー土地に根ざした行為と空間の研究を通してー

中村秋香(楳橋研究室)

2011年3月11日、東日本大震災において甚大な被害を受けた岩手県上館とふれあいセンター、隣接敷地に旧町役場が保存されることから、震災と復興を有した公共空間の在り方を考える。震災と復興を残していく資料館をもつ複合施設を提案する。また、現地でのワークショップによって得られた地域空間の特徴と質をいかし、被災以前からまことに存在していた広場の再構築をおこなう。



## 解体木材再使用に関する提案ー応急仮設住宅と支援校舎の設計を通じてー

二村絆菜子(遠藤研究室)

現在、解体木材の再資源化はほとんどがチップ化されるか焼却されている。また、活用方法として、家具ユニットによる応急仮設住宅と発展途上国への支援校舎の設計を行った。家具ユニットは日常時には家具や、間仕切り壁、支援校舎として利用され、災害時には応急仮設住宅に利用される。災害後、仮設住宅は解体され、本設や支援校舎での再使用が行われるなど、新たなサイクルをつくり出す。



## 感覚的要素を内包した空間モデルの設計 ーPLEATS PLEASE ISSEY MIYAKEの身体と衣服の関係性の研究を通してー

山内翔太(遠藤研究室)

繊細な隙間から構成することで、わずかに視点や視線を変えるだけでも建築の表情が多様に変化する。ヒューマンスケールのさわめて小さな部分から考えることで、人の存在を置き去りにしがちな巨大な建築が、私達とつながったような感覚を得ることができるのはないだろうか。その時、私たち

から遠く離れていた建築がとても近い存在となる。人の動きと建築の動きが感覚につながる。そんな建築との関係は服が人の動きに合わせてかたちを変えるよう、とても身近で感覚的なものではないだろうか?

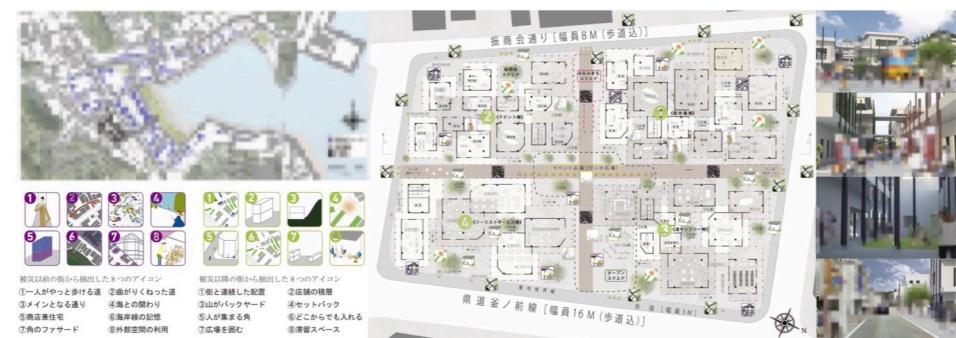


## 受け継がれるもの・積み重ねるものー気仙沼市内湾地区における被災前後の空間性を生かした商店街の設計ー

山田恭平(楳橋研究室)

震災被害を受けた後、「復興」はなるべく迅速な形で行われるべきであるが、その中で地域空間を読み取った地域毎の細やかな対応が必要となってくるのではないか。本研究は、東日本大震災によって甚大な被害を受け、土地区画整理事業等によって被災前後の風景が著しく変

化する可能性がある気仙沼市内湾地区における震災からの地域再生において、その地域で訪がれてきた震災以前・震災以降の街空間を分析・考察することにより、地域復興における最適な空間像を示すことを目的とする。



## 外国人留学生集住施設の設計 ー世界の飛び地の研究を通してー

殷小文(遠藤研究室)

本研究は世界の飛び地の考察、及び在日外国人留学生の現状調査を通して、留学生集住地における飛び地問題を発見でき、それに対して解決できる方法を探してきたが、実際により広い範囲で言えば、本設計は留学生宿舎という外国人集住地を利用し、移民による形成された飛び地のあり

方を掘り出して、さらに住民構成の多様化社会では多民族がどのように摩擦を避けて融合することを探求した。コンセプトのモデルは明確であるものの、形は多様なものであるので、他の国や地域にも応用できるといえる。

